

○外来植物を記録する (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: A record of new aliens

ハチミツソウ (新称) 保育社のカラーブックス 27 号(1963) に名古屋守山区の養蜂家、井上丹治氏のミツバチの世界という本がある。この本のなかの、蜜源植物を見ていたら、その 57 図にハネープラントという名の植物の写真があった。この写真では実物を知らなかったため、よくわからなかったし、ハネープラントという、特定の植物があるとも思われなかった。ハネープラントといえは、蜜源植物ということで、その草には、その草としての名がある筈である。しかし、私にはそれを写真で同定するだけの学がない。そこで、名城大学の橋本忠二郎氏をわざわざして、現地視察にいらしてもらったところ、井上さんから、株をわけていただいて送ってくれたので、それを植えておいたら、8 月末に花がさいた。調べて見たら、北米の *Verbesina occidentalis* (L.) Walt. という、キク科の草で、米名を Crown-beard というミズーリ河畔地区に多産する著名な蜜源植物であることがわかった。井上さんは、1961 にカタログでとりよせたとのことであるから、その年を入国年代としてよかろう。多年生で、草高 1 m 内外、茎に翼があり、対生葉はだいたい卵状披針形で両端はとがり、有鋸齒縁で多少有毛。頭花はサン房花序式につく。周辺花は黄色の舌状花で、その数 5 内外、中心の筒状花は 30 内外で黒色のヤクが超出する。総苞は重り合い各片卵状披針形で、ツボミのときはやや開いて、頭花をつつむので、いささかメナモミを思はせるためか、*V. siegesbeckia* Michx. という異名もある。しかし、花時には反転逆向する。舌状花も逆向してたれ下るので、そのさき方はコウリンカに似ているが、黄色だからキバナフウリンカに似ている。もちろん、属がちがうから、ただ似て見えるというだけのことである。和名は蜜源になるところからなづけた。なを井上さんは花の少ない夏にさくことと、ミツの量が多いという点が利点であるといわれたとのことである。目下のところでは井上さんが中京で栽培されているだけらしいが、この草の性質上いつかは園外に逸出して野外で見つかる可能性もある。

アワモリハッカ (新称) 東京本郷東大の一隅に外来の植物があるので、しらべて見たら、*Pycnanthemum flexuosum* (Walt.) B.S.P. 米名 Mountain mint という、シソ科のものであることを知った、この草は、多年生で地下茎でひろがり、叢生し、茎は方形で、褐色、やや有毛、木質、高さ約 70 cm、対生葉の腋から枝を出す。茎葉は楕円線状で、長さ 3—4 cm、裏面灰白。茎頂にはサン房花序をつける。苞は花より長く、先端芒状、がく片は披針状で、約 4 mm、芒状先端で花筒と同長、唇形花冠は、白色なるも時には帯紅色。筒部の長さ約 6 mm。花冠は上下 2 層にわかれ、上層はほぼ全縁、下層は 3 裂で、ときに細かい紫点あり。雄ずいは上部の 2 本は下部のものよりながい。この草の咲いているときには、遠くから見ると、ノコギリソウのように見える。花はとくにイブキジャコウソウに似た香がある。もっとも、この香は全草にあるのだが花においていちじるしい。米国北部の産。この和名は感じが出ないが、どうもよい考えが浮んでこ



Fig. 1. (Upper) *Pycnanthemum flexuosum* B.S.P. アワモリハッカ.
(Lower) *Verbesina occidentalis* Walt. ハチミツソウ.

ない。渡来は 1959 年頃。

キヌイトヌカキビ (新称)

東大の原研究室の黒沢幸子氏が、おそろしくきれいな

イネ科の外来品を友人の生花のなかから押取してきた。一見ヌカキビに似ているが枝が細く、小穂が細く、はなはだきれいなもので、これを同教室の李氏と許氏がともに *Panicum capillare* L. と同定されたが、その同定には異存はなく余りに正確であったが、和名がないのでキヌイトヌカキビとした。英語では Old witch grass というようだが、それにあやかれば山姥のなんとかいうことになるが、キノコにヤマウバノカミノケというのがあり、また山姥という観念はこのせん細な草にふさわしくないような気もするので、一応こんな新名を提唱した。和名には先占権の規定もないから、もっとよい名があったら従うことにする。この草は北米のものであるが、生花用の切花として利用されているところを見ると、近年輸入されて、どこかで栽培されているものと思われる。

シナダレスズメガヤ (北村氏新名) 近年土砂のくずれを防ぐ目的で各地で植えはじめたものに *Eragrostis curvula* (Schrad.) Nees. 英名 Weeping love grass がある。これは、比叡山の参道にうえられて名物になり、同山に行かれた人はパスガールの情緒ゆたかな説明をきかれたことであろう。もともと、アフリカのものだというのが現在北米では利用しているので、わが国には北米からきたものであろう。この草に、北村四郎教授は京都新聞社発行比叡山 (1961) の第 50 頁に比叡山の植物という項を分担され、そこでダレスズメガヤと命名されたが、私が頂いた別冊には、シナダレスズメガヤと肉筆で訂正してあるから、これを命名者の最終意志の表現としてそれに従うことにする。実はこの草の先行和名としては大井氏が浅井康宏氏の命名として北陸の植物 ● 巻 (1960) p. 98 でセイタカスズメガヤという名を公表されているが、私には北村氏の命名の方が名としては、そのものズバリであるから、それによることにした。しかし、両方の実物を見ていっているのではない。いづれにしても学名の場合の規定によらなくともよからう。それはそれとして、東京では近頃この穂をアルミニウム液に浸して銀鍍金したものが、花屋の店頭で現れだした。まことに奇妙な趣味が流行し出したものである。しるして、後の世の人の参考に資する次第である。もっとも、同じようなことが、いろいろなものにも行われ *Asparagus virgatus* Baker を同じように処理したものを店頭で見かける。

(東邦大学)

Summary *Verbesina occidentalis* (L.) Walt., *Pycnanthemum flexuosum* (Walt.) B.S.P., *Panicum capillare* L. and *Eragrostis curvula* (Schrad.) Nees are recorded as new aliens.

☐ Glowes, F.A.L.: **Apical meristems**. Blackwell Scientific Publications, Ltd. Oxford (1961), pp. 217 pls. 32 近頃とくに注目されている基端及び根端の分裂組織の知識を両者に共通する面に重点をおいてまとめたもの。分裂組織における分化、芽の形成、葉原基の位置決定の機構、手術による解析等の組織次元はもちろん、根の somatic polyploidy, 核酸の問題にまで一応わたっていて便利な本であるので少々以前の出版だが紹介する。37s, 6d. 32 枚の写真も役立つ。

(前川文夫)